Webアプリ、APIアプリ、モバイルアプリ、Function(関数)アプリをホスティングできる プラットフォームが提供される 最新の言語のランタイムがすぐに使える [12]App Service OSやランタイムのアップデートも自動的に行われる PaaS 開発者は、開発したコードをすぐにApp Serviceにデプロイして運用できる VMでアプリを運用する場合に比べて、手間がかからない 生産性が向上 アプリは、プランの上で動く プランは、VMSS+LB のようなもの。 プランの上で複数のアプリを動かすことができる [5]-[8]アプリとプランの関係 料金はアプリではなく、プランに対して発生する [6]プランの「価格レベル」によって、その上で使える機能が変わってくる。 [7][8]スケールアップ、スケールアウトは、プランのレベルで実行する。 [9]デモ:プラン作成、アプリ作成、アプリへのアクセス ランタイムスタック(言語)を選択 OSを選択(Windows/Linux) このアプリを乗せるプランを選択 アプリ名をsampleとすると、sample.azurewebsites.net のようなドメインが割り当てられる [13]App Service アプリの作成 Azure App Service 開発者は、Visual Studio や Visual Studio CodeでWebアプリを開発する mod9 サーバーレス 開発したアプリを、App Serviceのアプリにデプロイして稼働させることができる この場合は任意のランタイムを使用できる Dockerコンテナーをデプロイすることもできる。 GitHub、Azure DevOpsなどのソースコード管理(バージョン管理)でコードを管理 開発者はコードをリポジトリにプッシュする [14]継続的デプロイ プッシュしたコードが自動的にパイプラインでビルド、単体テストされ、App Serviceアプリにデプロイされる CI/CDを実現可能 アプリの中に複数のデプロイスロットを作ることができる アプリ名をsample, デプロイスロットの名前を staging とすると、sample-staging.azurewebsites.net のよ うなドメイン名が割り当てられる 運用中のアプリ(sample.azurewebsites.net) に影響を与えず、ステージング環境(sample-staging. [15]デプロイスロット azurewebsites.net) にデプロイを行うことができる スロットのスワップができる Standardプランの場合、最大5 など アプリが動いているプランによって、使えるスロット数が異なる。 EasyAuthとも呼ばれる、App Serviceに組み込みの認証機能を(必要であれば)使える [16]App Serviceの保護 Azure ADアカウントによる認証を有効化できる つまり、Azure ADでサインインすることで、アプリにアクセスできるようにすることができる。 Azure Container Instances (ACI)

Azure Kubernetes Service (AKS)